

みすのお ひがしたなかいせき 1. 御簾尾・東田中遺跡

所在地：あわら市東田中地係

調査原因：国道 8 号福井バイパス建設事業

調査期間：平成 27 年 5 月 1 日～12 月 28 日

調査主体：福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

調査面積：3,730 m²

時代：縄文、弥生、古墳、奈良・平安、中世



位置図 (S=1/50,000)

調査の概要 御簾尾・東田中遺跡は奈良時代～中世の散布地として福井県の遺跡地図に登録されている遺跡で、あわら市御簾尾・東田中にまたがって広範囲に展開しています。今回の調査対象地は東田中遺跡範囲の中央北端にあたり、国道 8 号バイパスが新たに建設されるため、ほぼ南北に縦断する形で調査を行いました。調査前の状況は水田でした。調査の結果、調査区北半部で掘立柱建物群を、南半部で東西に横断する溝とピット群などの遺構を検出しました。

遺構 調査区の中央を東西に横断する近現代の河川のため、遺構は中央では確認できず、北半部と南半部にまとまって確認できました。

北半部では掘立柱建物 21 棟 (SB1～21) のほか、竪穴状建物 (SH1) 1 棟、小穴多数、土坑 1 基 (SK1)、溝 5 条 (SD4～8) などの遺構を検出しました。

検出した掘立柱建物の規模は、SB1 が 5 間×2 間 (南北約 9m×東西約 5.2m) で今回の調査で検出された建物では最大です。建物群は、ほぼ真北方向に割り付けされ計画的に配置されたものと推定できますが、重複関係や微妙な軸ずれが確認でき、少なくとも 2 時期にわたり存在していたと考えます。建物には、4 間×2 間以上の規模がある廂 (ひさし) 付建物 SB 8 が確認でき、通常の集落とは異なる官衙 (かんが) 的な特徴があります。また、内部に間仕切りがある建物 (SB3・15) が存在しています。こうした建物は馬房を備えた建物であった可能性が高いと推定できます。総柱建物 SB5 の下層からは、土坑 SK1 が検出できました。長さ約 4 m、幅約 1 m を測る長方形の土坑で、内部に弥生土器が転落するような形で残っていました。掘立柱建物群の際に、こうした古い時期の遺構が削平された可能性が高く、SK1 のような深い遺構のみ残存したものと推定できます。

調査区の南半部では、溝 2 条 (SD2・3) や小穴は検出できましたが、北半部のような建物群は確認できませんでした。水田整備の際に削平されたものと考えられます。

遺物 調査区の北半部では、奈良・平安時代の土器 (須恵器・土師器) が主な遺物です。須恵器の中には、稜椀や風字硯などが確認でき、一定の役割を与えられていた識字層が居住していたものと推定できます。こうした律令期の土器群は 8 世紀後半から 9 世紀後半代のものでしめられており、8 世紀前半にさかのぼるものは確認できていません。

土坑 SK1 からは、弥生土器の壺・甕のほか、碧玉製管玉が 1 点出土しました。また、調査区の北西部では、中世の土器、陶磁器、銅銭が出土しました。こうした遺物は隣接する今村氏館跡に関連するものと推定できます。

まとめ 発掘調査によって、奈良・平安時代の官衙的な建物群を確認することができました。これまでの古代史研究では、周辺に北陸道の三尾駅が存在が指摘されていました。古代官道の駅は、駅単独で経営されるものではなく、周辺に駅戸（えきこ）集落を配置し、運営されていることが明らかです。今回の調査成果を総合すると、これらの建物群が、三尾駅の運営にたずさわった駅戸集落である可能性が高いことを示しています。今後の三尾駅の発見につながる大きな成果であるといえます。（宮崎 認）



写真 1 調査区全景（北から）



写真 2 廂付建物 SB8（北から）



写真 3 間仕切りがある建物 SB15（北から）



写真 4 下層土坑 SK1（西から）